

資料

自己嫌悪感尺度の作成²水間 玲子¹

THE CONSTRUCTION OF SELF-DISGUST SCALE

Reiko MIZUMA

The purpose of this study was to construct the SELF-DISGUST SCALE. In this study, self-disgust was defined as a feeling that “whether in fact or not, one recognizes that negative feeling or negative phenomenon comes from himself and feels himself disgusting”. The elements to be contained in the SELF-DISGUST SCALE were : 1. aggression for himself, 2. helplessness or discouragement, and 3. self destruction. 21 items were selected. Although this scale had three elements, factor analysis suggested that this scale consisted of one factor. Reliability examined by Cronbach’s alpha coefficient and split-half technique proved sufficiently high. Conceptual validity was examined in relations with two scales on negative self, self-esteem, and self-consciousness. By Pearson’s correlation coefficients, SELF-DISGUST was negatively related to self-esteem, and positively related to other scales. These results showed this scale had satisfying conceptual validities. But private self-consciousness was positively related to SELF-DISGUST only in male. This unexpected sex difference and the one-structure of this scale were considered to contain much implication for further elaboration of a study on self-disgust.

Key words : self-disgust, reliability, conceptual validity.

問題と目的

心理学の研究において、自己嫌悪感に関する研究は筆者の知る限りではまだ乏しいように思われる。それでも生活感情の1つとして（例えば落合, 1985a, 1985b）あるいは他の感情の因子として（例えば宮下・小林, 1981）指摘されてきたし、近年では佐藤（1994）の自己嫌悪感についての独自の研究がみられ、今後の研究がさらに期待されるものであると思われる。佐藤は自己嫌悪感を広く“自分が自分で今の自分をいやだと思うこと”と

定義し、自分のどんなところをいやだと感じるかという要因を解明する尺度を作成している。この尺度は、自己嫌悪感を要因によって分節させ、自己嫌悪感（例えば“課題遂行停滞による自己嫌悪感”）の対象となるものを検討するのに適している。だが、どこがいやなのかではなく、全体的に自己に関して、どれくらい“嫌悪する”方向の評価的感情を自ら抱いているのかを測定する尺度を作成することが、本研究における筆者のねらいである。その点では、生活感情尺度の因子分析の際に抽出された自己萎縮の因子（内田, 1990）や疎外感尺度の因子分析の際に抽出された自己嫌悪感の因子（宮下・小林, 1981）の項目が内容的に筆者のねらいに近いものであるが、それらは別の尺度作成の際に偶然抽出された因子に属する項目である。ここでは、筆者の自己嫌悪感についての定義に基づいた自己嫌悪感尺度を作成し、

¹ 京都大学大学院教育学研究科（Faculty of Education, Kyoto University）

² 本論文は筆者が1995年1月に大阪大学人間科学部に提出した卒業論文を元に再度分析および調査を行い、加筆・修正したものである。

その信頼性、概念的妥当性を検討することを目的とした。

ではまず、自己嫌悪感とは、他の感情とはどのような関係にあるのだろうか。そのことについて考えることは、自己嫌悪感の特質を問う上で有意義であろうから、その視点から先行研究を概観した。

落合 (1985a, 1985b) はクラスター分析を用いた研究で、青年期においては自己嫌悪感・劣等感・あるいは孤独感と類縁関係にあること、老年期においては無気力感と類縁関係にあることを示している。返田 (1986) も自己嫌悪感と劣等感とが似た感情であるとしている。宮下・小林 (1981) では疎外感尺度の因子として自己嫌悪感因子が抽出されている³⁾。だが、まず、自己嫌悪感・孤独感のように“自分は1人である”という感情ではなく、そういった、例えば“1人である自分”を好きか嫌いかという感情である。無気力感や疎外感についても同じく、それらの感情を抱く自分を好きか嫌いかという感情が自己嫌悪感である。劣等感・それ自体が自己の優劣に関わる評価的感情なので、自己嫌悪感との共通点は多いと筆者にも思われるが、自己嫌悪感の場合は“好きか嫌いか”ということが問われるのであって、優劣が問題になるのではない。また、自己嫌悪感・孤独感・劣等感・それ自体はあくまでも主体が自分自身であり、自己を対象化して、好き・嫌いという次元で評価的感情を抱くということ、そしてその評価の主人公が他ならない自己なのだという点で特徴的である。

その評価的感情の抱き方についてであるが、詫摩(1978)が青年の自己嫌悪は事実的要因よりも観念的要因によるものが多いと述べていることから、自分をいやだという感情を抱く根拠は非常に主観的であり、他者からみると、それがふさわしくないと思える場合もあるかと思われる。よって筆者は自己嫌悪感を“客観的事実はどうであれ、否定的な感情や事象が自分自身に由来するとし、自分が自分自身のことをいやだと感じること”と暫定的に定義する。

それでは自己嫌悪感の内容については今までどのような考察がなされているのだろうか。尺度作成にあたり、現時点で明らかにされる自己嫌悪感の持つ様相について考えてみたい。自己嫌悪感について西平(1973)は、“自分の存在そのものが、羞恥・悔恨・慚愧などの感情に動かされてなんともいたたまれない気分”と表現し、自己嫌悪感是自己自身に向かう攻撃性であり、

自己自身に向けられた羞恥心であるとしている。詫摩(1978)は、“自分の行動、自分の容姿、自分の性格など自分に関するものを眺めたり考えたりしてそれに不充足感を感じること”を自己嫌悪とし、そのときには“暗く沈んだ気分と自己縮小感”が体験されると述べている。また柏木(1988)の、内発的動機付けの高いものは自己嫌悪感が低く、外発的動機付けの高いものは自己嫌悪感が高い、という結果からは、自己嫌悪感が主体性や内的能動性の後退と関係しているのではないかとと思われる。以上のことから、自己嫌悪感が自己への怒りを伴う激しい感情であると同時に、自己への無力感や意気阻喪感を伴う感情でもあることが考えられる。

また、青年期においては“自我の目覚め”といわれるように、自己に対する意識は急激に高まり、激しい自己探求が行われることが知られているのであるが、この時期において自己嫌悪は特に深刻であると託摩(1978)は述べる。そして、その理由として青年の理想が高いという点、自分に関心があるために周囲との比較を行いがちである点、そして自分についての知識が乏しい点を挙げている。自己を知ろうとして自己に敏感になればなるほど、自己の否定的な側面に気づき、自分に対する否定的な感情である自己嫌悪感に陥ることもあろうと考えられる。だが、自己に対する思い入れやこだわりが強いと、自己嫌悪感を感じても自己から意識を転じることをせず、むしろなおさら自己へ意識を向け、自己への感情にとらわれてしまう者もいるだろう。これは皮肉なことではあるが、福島(1971)は自己嫌悪感が自己愛的傾向と表裏の関係にあることを指摘しており、また、有島(1920)は、“憎むことは愛の対極ではなく愛の対極は愛さないことだ”という洞察をしている。自己嫌悪感とは自分に対していやだと思いつつも自己への関心の高さや自己へ向かうエネルギーの強さを表わしている複雑な感情であると考えられ、むしろそれこそが自己嫌悪感の本質なのかもしれないともいえる。それが、時には人を自殺にまでいたらせることもありうるのである(例えば桐田、1992; シュブランガー、1963)。もちろん、自己嫌悪感の持つエネルギーの積極的意味を提案する言及も見られる(荻野、1978)が、自己嫌悪感を感じているその時点では、自己の深刻な動揺こそが当人の意識において何よりも重大な問題であることに違いはないと思われる。

これらのことから、実感として意識される自己嫌悪感を特徴づけるものとしては、自己への怒り、および自己への無力感や意気阻喪感が挙げられる。また、自己嫌悪感が自己破壊性につながる可能性をも考慮に入

³ ただし、宮下らはこの際 self-contempt という英訳をしている。

れたいと思う。よって、自己嫌悪感尺度には①自己への怒り②自己への無力感や意気阻喪感③自己滅亡感の要素が含まれるべきであると考えられよう。この3点を本研究で自己嫌悪感尺度を作成する際に含まれるべき構成要素とする。

また、尺度の概念的妥当性に関しては、内容的に近いことから内田(1990)の生活感情尺度で抽出された自己萎縮因子の項目(以下、便宜上“内田項目群”と記述)および宮下・小林(1981)の自己疎外感尺度において抽出された自己嫌悪感因子の項目(以下、便宜上“宮下項目群”と記述)、自己嫌悪感が自己に対する否定的な感情であることから自己に対する肯定的な感情である自尊感情、上述のように自己への否定的な感情と自己意識の高さとの関わりが指摘されていることから、自己に意識の向かいやすい人格特性である自己意識特性との関連をみて検討する。

予備調査

目的

自己嫌悪感という負の自己体験を測定するための項目を作成する。その際、①自己への怒り②自己への無力感や意気阻喪感③自己滅亡感のそれぞれに関わる項目が含まれるようにする。

方法

自己嫌悪感を表現する記述を集めるために、“あなたは、‘自分がいやだ’‘自分がきらいだ’と感じたとき、どんな気持ちになりますか”という問に対し、自由記述で回答を求めた。回答者は国立大学の大学生51名(男子23名、女子28名)であった。調査時期は1994年9月下旬。

結果

“イライラする”“怒りを感じる”などのように自己への怒りを伴う記述、“うんざりする”“あきらめを感じる”などのように自己への無力感や意気阻喪感を伴う記述、“死にたくなる”“消えてしまいたくなる”などのように自己の滅亡につながる記述が得られた。これは筆者の自己嫌悪感尺度の構成要素に合致する。それらを元に筆者が加筆・修正をし、自己嫌悪感を形容するのに適当と思われる文章を作成した。さらに、被験者への配慮として、“自分に誇りを感じるがある”など、自己への肯定的な感情を表現する12個のグミ項目を加え、最終的に40個の項目を作成した。

本調査

目的

自己嫌悪感をどれくらい抱くかを測定する尺度を作成し、性差、信頼性、概念的妥当性について検討する。概念的妥当性検討の際には、内田項目群、宮下項目群、自尊感情、自己意識特性の4点を用いる。概念的妥当性検討の際の仮説は以下の通りである。内田項目群、宮下項目群とは概念的にも重なるところが多いので、正の相関を示すと思われる。そして自己嫌悪感に陥りやすくなっている時点では自己への評価的な意識のあり方が全体的に否定的になっていると考えられるので、自己に対する肯定的な感情である自尊感情とは負の相関を示すと思われる。また、自己への意識の高さと自己への否定的な感情との関わりが指摘されているので(例えば訥摩, 1978; 牛島, 1954)、自己に意識の向かいやすい人格特性である自己意識特性とは正の相関を示すと思われる。なお、自己意識特性については、容姿容貌や外見・行動などのように、他者から観察可能な自己の外見や行動などへと向かう意識である公的自意識と、動機・感情・志向・理念などのように、それを経験している本人にしかわからない自己の内面へと向かう意識である私的自意識という2つの自己意識により構成されている(辻, 1993を参照)のでそれぞれについて検討する。ただしいずれも自己に意識が向かいやすい人格特性であるので、おそらくどちらも自己嫌悪感とは正の相関を示すと思われる。

方法

質問紙の構成 調査は2度にわたって行われた。調査1では①予備調査で作成した自己嫌悪感の項目40項目“いつもである・よくある・たまにある・あまりない・ほとんどない・全くない”の6件法、②自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982⁴)“非常にあてはまる”―“非常にあてはまらない”の5件法、③自己意識尺度21項目(菅原, 1984⁵)“非常にあてはまる”―“非常にあてはまらない”の7件法、以上をすべて1冊の冊子にまとめて配布し、回収した。調査2では①調査1において分析された結果採用された自己嫌悪感の項目21項目“非常にあてはまる”―“全くあてはまらない”の5件法⁶、②内田項目群4項目(内田, 1990)“非常にあてはまる”―“非常にあてはまらない”の5件法、③宮下項目群(宮

⁴ Rosenberg の self-esteem scale を訳した自尊感情尺度10項目。この尺度は山本ら(1982)の研究の際に翻訳された。論文には記載されていないが、“心理尺度ファイル”(堀・山本・松井, 1994)に収録されている。

⁵ Fenigstein et al. の self-consciousness scale を元に日本語版として作成したもの。私的自意識に関する項目10項目と公的自意識に関する項目11項目の21項目からなる。今回は自己に意識を向けることのみに焦点を当てる目的上、社会的不安が含まれていない尺度が適当であるため、この尺度を採用した。

下・小林, 1981) “非常にあてはまる” — “非常にあてはまらない” の 5 件法, 以上を全て 1 冊の冊子にまとめて配布し, 回収した。

調査対象 調査 1 では東京, 京都, 大阪, 兵庫, 福岡, 鹿児島 of 大学生・大学院生 478 名 (男子 198 名, 女子 280 名, 平均年齢は 21.1 歳)。調査 2 では京阪神 of 大学生・大学院生 261 名 (男子 130 名, 女子 131 名, 平均年齢は 18.7 歳)。

調査時期 調査 1 は 1994 年 10 月下旬—11 月上旬。調査 2 は 1995 年 10 月下旬—11 月上旬。

分析手続 (1) 調査 1 における自己嫌悪感の項目について再度内容分析をし, 通過した項目について因子分析, 弁別力および信頼性の検討を行い, 最終的な項目を決定する。(2) 調査 2 についても同様に, 因子分析, 弁別力および信頼性の検討を行う。(3) 作成された自己嫌悪感尺度の概念的妥当性の検討を行う。その際には相関係数を算出して, それぞれの尺度との関連をみることにする。また, 性差がみられるかについても検討する。

結 果

自己嫌悪感尺度の作成および信頼性の検討

調査 1 より 自己嫌悪感を抱く度合いを測定する尺度については, まず挿入されていたダミー項目を除き, また, 再度内容分析を行い, 自己嫌悪感に含まれるべき 3 要素に相当しない項目を除いた。その結果 21 項目が分析対象となった⁶。“いつもである” を 6 点—“全くない” を 1 点として得点化した。上位・下位それぞれ約 25% のものを抽出し, G-P 分析を行ったところ, 全項目において, 1% 水準で上位群が下位群より有意に高い得点を示していたので, 尺度の弁別力は十分であると判断された。以下, 項目の番号は便宜上調査 2 で付された番号を用いる。

男女まとめて主因子法による因子分析を行った結果, 第一因子の固有値が著しく高く (9.100), 第二因子の固有値 (1.829) との落差が大きかったことから, 内容的には筆者の想定した 3 要素を含んではいるもののこの尺

度は“自己嫌悪感”という一因子で解釈することが適当であると思われた。(因子負荷量を TABLE 1 に掲載)。なお第一因子による説明率は全分散の 40.6% であった。21 項目間の内的信頼性については, Cronbach の α 係数が .931, Spearman-Brown の公式による信頼性係数が .903 であり, 十分な信頼性を有していると思われた。

各項目の得点の平均値について男女によって違いがあるかを調べるため, t 検定を行った結果, 項目 14 においてのみ有意な差がみられただけで ($t(476) = 2.39$, $p < .05$) 他の項目についてはその差は有意ではなかった。

調査 2 より “非常にあてはまる” を 5 点—“全くあてはまらない” を 1 点として得点化した。調査 1 同様, 上位・下位それぞれ約 25% の者を抽出し, G-P 分析を行ったところ, 全項目において, 1% 水準で上位群が下位群に比べて高い得点を示したので, 弁別力は十分であると判断された。

主因子法による因子分析の結果, 第一因子の固有値が非常に高く (10.120), 第二因子の固有値 (1.681) との落差が大きかったことから, やはりこの尺度は一因子構造であることが明らかになった⁸ (因子負荷量を TABLE 1 に掲載)。なお, 第一因子による全分散の説明率は 45.8% であった。内的信頼性については, Cronbach の α 係数が .944, Spearman-Brown の公式による信頼性係数が .926 と高く, 十分な信頼性を有していると思われた。得点の性差の検討のため, t 検定を行ったところ, 調査 1 の時よりも各項目の得点の平均値に性差がみられた (TABLE 1 に得点の性差について記載)。

本研究においては, この 21 項目をもって自己嫌悪感尺度と命名し, 自己嫌悪感尺度 21 項目の得点を単純に合計したものを自己嫌悪感得点とする^{9,10} (調査の都合により内田項目群, 宮下項目群との関連を見る際には調査 2 で得られた自己嫌悪感得点を, 自尊感情, 自意識特性との関連を見る際には調査 1 で得られた自己嫌悪感得点を用いる)。なお, 自己嫌

⁸ 調査 1, 2 いずれにおいても因子構造については性差はみられなかった。

⁹ ただし, 項目 14 は因子負荷量が .400 以下と, 他の項目に比べ因子負荷量が低いため, 慎重になる必要があった。だが, 内容的には“自己滅亡感”の項目としてさほど不適切とは思われないこと, また, 調査 2 では因子負荷量が .450 となったことから, 削除する必要はないと思われたので項目 14 を含む 21 項目に決定した。

¹⁰ なお, 調査 1, 2 それぞれで因子数を適宜指定して分析も行ってみたところ, いずれにおいても 2 因子 (自己への怒り因子, 自己の滅亡因子) で解釈される方向も示唆されたのであるが, その際, 項目の分かれ方が不安定であった。よって最終的に 1 因子のものとして取り扱うことにしたのであるが, 2 因子の解釈の可能性があることもつけ加えておく。

⁶ 調査 1 においては自己嫌悪感を抱く程度, 感じやすさを測定する際に, いつもそうであるわけではなくとも時として自己嫌悪感に陥る可能性があるとして頻度を問う形式をとった。しかし, 質問項目自体に“……することがある”という記述があり, それだけでどの程度自己嫌悪感を抱きやすいのかを問うという目的は果たされると思われる。そこで調査 2 では一般的な選択肢であるこの形式に変更した。

⁷ 残された 21 項目については心理学専攻の大学院生 1 名の協力を得, それぞれの要素にふさわしい自己嫌悪感の項目である事が確認された。

TABLE 1 自己嫌悪感尺度の得点の性差の検討および因子分析の結果について

自己嫌悪感尺度の項目	因子負荷量		調査2の得点の 性差 ^{a)} とt値
	調査1	調査2	
01. 自分が全くダメだと思う事がある	.710	.774	$\langle 3.57_{(258)}^{***}$
02. 自分がいやになる事がある	.726	.801	$\langle 4.55_{(258)}^{***}$
03. 自分を憎らしいと思う事がある	.645	.689	$\langle 1.76_{(258)}^{*}$
04. 消えてしまいたくなるときがある	.678	.675	$\langle 3.16_{(258)}^{***}$
05. 自分をきらいになる事がある	.733	.735	$\langle 3.93_{(258)}^{***}$
06. 自分に怒りを感じる事がある	.638	.626	$\langle 2.59_{(258)}^{*}$
07. 自分に失望する事がある	.722	.788	$\langle 2.56_{(258)}^{*}$
08. 死にたくなる事がある	.508	.502	$\langle 1.71_{(258)}^{*}$
09. 自分がみじめになる事がある	.642	.764	$\langle 3.72_{(258)}^{***}$
10. 自分をめちゃくちゃにしたくなる事がある	.546	.586	
11. 自分に愛される価値は全くないと感じる事がある	.607	.653	
12. 自分にうんざりする事がある	.743	.791	$\langle 3.08_{(258)}^{**}$
13. 自分である事が悲しくなる事がある	.683	.637	
14. 別の人間に生まれ変われたらよいのにと思う事がある	.386	.448	
15. 生きているのが罪だと感じる事がある	.492	.424	
16. 自分にイライラする事がある	.601	.710	$\langle 4.93_{(258)}^{***}$
17. 自分に嫌気がさす事がある	.738	.803	$\langle 4.61_{(258)}^{***}$
18. 自分を許せないと思う事がある	.669	.674	
19. 自分を覆立たしく思う事がある	.644	.736	$\langle 2.93_{(258)}^{**}$
20. 現実の自分にショックを受ける事がある	.593	.632	$\langle 3.66_{(258)}^{***}$
21. 自分にあきらめを感じる事がある	.542	.571	$\langle 1.37_{(258)}^{*}$

(* $p<.10$, ** $p<.05$, *** $p<.01$, **** $p<.001$)^{a)} 平均値の性差がみられた項目についてはすべて“男子の平均値<女子の平均値”であった。

悪感得点の平均値に関して、男女による有意な差は調査2においてのみみられた(男子 $M=58.8$, $SD=18.9$, 女子 $M=66.4$, $SD=13.9$; $t(258)=3.68$, $p<.001$)。

自己嫌悪感尺度の概念的妥当性

内田項目群4項目、宮下項目群13項目はいずれも“非常にあてはまる”を5点—“非常にあてはまらない”を1点として得点化した。共に内的信頼性は十分であり(Cronbachの α 係数、順に.809、.833)、また、それぞれ主因子法による因子分析を行った結果、どちらも一因子よりなることが明らかになった。そこで単純合計得点をそれぞれ便宜上内田得点、宮下得点とし、自己嫌悪感得点との相関係数を算出した。その結果、自己嫌悪感得点はいずれとも高い正の相関を示し(順に $r=.723$, $p<.001$; $r=.451$, $p<.001$)、また相関の仕方に男女差はみられなかった(TABLE 2)。

自尊感情尺度は“非常にあてはまる”を5点—“非常にあてはまらない”を1点として得点化し、逆転項目

TABLE 2 自己嫌悪感得点と各尺度の得点との相関^{a)}

自己嫌悪感得点	
内田得点	.723***
宮下得点	.451***
自尊感情得点	-.684***
公的自意識得点	.317***
男子	.277***
女子	.346***
私的自意識得点	.162***
男子	.282***
女子	.064

(***) $p<.001$

^{a)} 公的自意識得点、私的自意識得点以外のものは相関の仕方により性差がみられなかったため、男女まとめて算出した相関係数のみを示した。

については、5点を1点、1点を5点のように逆に得点化した。主因子法による因子分析を行ったところ、従来通り一因子が抽出されたが、項目8(もっと自分を尊敬できるようになりたい)においては因子負荷量・共通性が共に極端に低かったため、項目8を除く9項目を本研究では用いた。9項目でのCronbachの α 係数は.862であった。項目8を除く9項目の単純合計得点を自尊感情得点とし、自己嫌悪感得点との相関係数を算出したところ、負の相関($r=-.684$, $p<.001$)が示された。なお、相関の仕方に性差はみられなかった(TABLE 2)。

自意識尺度については“非常にあてはまる”を7点—“非常にあてはまらない”を1点として得点化した。逆転項目については7点を1点、1点を7点のように逆に得点化した。主因子法・バリマックス回転による因子分析を行ったところ、従来の研究結果と同じく、二因子からなることが分かった。本調査においては、第一因子が公的自意識、第二因子が私的自意識に相当するものであった。続いて回転後の因子の負荷量が低い(.400以下)項目である2(世間体など気にならない)、20(気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じとる方だ)を除いた。Cronbachの α 係数の値は第一因子10項目については.882、第二因子9項目については.851であり、信頼性は十分であった。また、第一因子と第二因子の説明率は全分散の42.6%であった。本研究ではこの19項目を分析の対象として用いた。また、第一因子を公的自意識因子、第二因子を私的自意識因子とし、各因子に高く負荷する項目の単純合計得点をそれぞれ、公的自

意識得点、私的自意識得点とした。自己嫌悪感得点と公的自意識得点・私的自意識得点について、ピアソンの相関係数を調べたところ、自己嫌悪感得点と公的自意識得点、私的自意識得点はいずれも有意な正の相関を示した（順に $r=.317, p<.001$; $r=.162, p<.001$ ）。ただし、男女別に検討したところ、性差がみられ、自己嫌悪感得点は公的自意識とは男女ともに正の相関を示したが（男子 $r=.277, p<.001$, 女子 $r=.346, p<.001$ ）、私的自意識得点とは男子でのみ有意な正の相関（ $r=.282, p<.001$ ）を示し、女子では自己嫌悪感と私的自意識との関連はみられなかった（TABLE 2）。

考 察

本研究では、自己嫌悪感についてこれまで指摘されてきた事柄に基づいて、自己嫌悪感尺度を作成した。筆者は項目作成の際に3つの要素を想定していたのであるが、因子分析ではこの尺度を一因子構造のものととらえるべき結果が出た。このことは自己嫌悪感という感情に内在するいくつかの様相が、複雑に絡まり合っていて、結局“自分がいやだ”という気持ちにまとめられることを示したのではないと思われる。

G-P 分析、内的信頼性の検討の結果からはこの尺度が十分な弁別力・信頼性を有しているということができる。ただし、自己嫌悪感得点の性差について考える際には、2回の調査で結果が異なっており、調査1では性差は見られなかったが、調査2では女子の方が自己嫌悪感が強い傾向が示された。だが、尺度の構造上には性差はみられず、男女に関係なく自己嫌悪感の尺度として使用するに値するものと思われる。

概念的妥当性の検討については調査の際に立てた仮説がほぼ実証され、自己嫌悪感尺度の構成概念妥当性がある程度示されたと思われる。ただし自意識特性のうち私的自意識については、男女まとめた場合には有意な正の相関がみられたのだが、女子のみの場合はそれは有意ではなかった。この点はこの尺度に関する考察を深めるものなので、やや詳しく考えてみたい。

自己嫌悪感が（他人がどう思うかはともかく）自分が自分に対して抱く感情であることを考えると、それはまず私的自意識と関わると思われる。また、先行研究を概観しても、私的自意識の高い人は出来事の原因帰属において自己帰属の割合が高いこと（Buss & Scheier, 1976）から、自己にとって不利な結果であっても自己に帰属してしまう可能性が高いこと、自己の感情の知覚が鋭敏であること（押見, 1980; Scheier & Carver, 1977; Scheier, Carver & Gibbons, 1979）から、自己嫌悪感を感じたとき

により強烈に受けとめてしまうであろうことが予想される。よって、やはり私的自意識と自己嫌悪感とは正の相関を示すであろうと考えられるのであるが、これらの研究では性差の問題についてはあまり検討されていない。本研究でみられた結果について考える際には、梶田（1988）の指摘が非常に参考になるので挙げておきたい。

梶田によると、自己評価の際に重要とされる側面が男女によって異なっており、女子では“他者のまなざしへの意識を中心とした領域”が、男子では“自己のまなざしへの意識を中心とした領域”と“他者のまなざしへの意識を中心とした領域”のどちらもが自己評価的意識を左右する重要な意味を持つ。今回の結果をその観点でとらえると、自己評価の上で重要とされる側面が、自己嫌悪感においても同様に関わっていることが示されたといえる。自己嫌悪感が好き・嫌いの次元における、自己に対する評価的な感情であることを照らすとそれは至極当然のことであろう。その点で考えると、自己嫌悪感と自意識特性との関連の仕方は仮説とは若干異なっていたが、そのことから本研究で作成した尺度が、自己評価的な意識のあり方ともうまくつながっていることを示し、意味深い結果であったといえる。

ま と め

自己嫌悪感は、心理学において確固たる地位を占めている専門用語というよりは、むしろわれわれが日常的に用いる言葉として使われている。それは誰もが折りに触れて体験する感情であるがゆえであろう。このような自己に関する日常の情緒的体験に目を向け、それについて研究を進めることは自己意識研究においても非常に意義のあることであると思われる。そこで自己嫌悪感の研究を進めるに当たり、本研究では自己嫌悪感という負の自己体験のあり方を測定する尺度を独自に作成した。得点の性差については別の考察が必要となるが、一因子構造としての使用については、尺度の構造自体の性差はひとまず考えなくてよいと思われる。また、信頼性は十分であり、構成概念妥当性もある程度検証されたといえる。

今後の課題

本研究では自己嫌悪感尺度を作成する際に、3つの要素を設定したが、分析の結果では一因子で解釈するのが適当とされた。それは自己嫌悪感に内在する要素が複雑に絡まり合っていることを示すものと考えられ

たが、想定した3要素はやはり概念的には異なるものであると思われる。この点についてはさらに考察を深め、検討していく必要がある。また、概念的妥当性において現れた性差は仮説とは異なっていたが、評価的感情のあり方に性差がみられることを示すものとなった。この点もこれからの研究の課題に含まれてくると思われる。

自己嫌悪感、身近だが非常に複雑な感情である。それについて研究を進めていく際には、自己嫌悪感に陥ったときの個人の自己に対する構えの在り方や、個人にとっての自己嫌悪感のもつ意味合い、他の評価的感情との関連などの視点からのアプローチも有効であろう。本研究を礎に、さらに探求していきたい。

引用文献

- 有島武郎 1920 惜しみなく愛は奪う 角川文庫 (1969)
- Buss, D.M., & Scheier, M.F. 1976 Self-consciousness, self-awareness, and self-attribution. *Journal of Research in Personality*, 10, 463—468.
- 福島脩美 1971 感情の発達 青年心理学 多摩書房
- 堀 洋道・山本真理子・松井 豊編 1994 心理尺度ファイル 垣内出版
- 梶田穀一 1988 自己意識の心理学[第2版] 東京大学出版会
- 柏木恵子 1988 青年の学習動機づけ (西平ら編) 青年心理学ハンドブック 福村出版 Pp.353—375.
- 桐田克利 1992 失墜の闇あるいは飛翔の光(四)一少女Aの苦悩に寄せて— 香川大学教育学部研究報告I部, 85, 1—21.
- 宮下一博・小林利宣 1981 青年期における“疎外感”の発達と適応との関係 教育心理学研究, 29, 297—305.
- 西平直喜 1973 青年心理学 共立出版
- 落合良行 1985a 青年期における孤独感を中心にした生活感情の関連構造 教育心理学研究, 33, 70—75.
- 落合良行 1985b 生活感情の関連構造からみた青年期の孤独感に関する特徴 一児童期・成人期・老年期との比較— 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 35, 157—164.
- 荻野恒一 1978 自己嫌悪のすすめ 青年心理, 9, 418—426. 金子書房
- 押見輝男 1980 自己焦点注意とユーモア感知 立教大学心理学科研究年報, 21/22, 50—56.
- 佐藤有耕 1994 青年期における自己嫌悪感の発達の变化 教育心理学研究, 42, 253—260.
- Scheier, M.F., & Carver, C.S. 1977 Self focused attention and the experience of emotion: Attraction, repulsion elation, and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 625—636.
- Scheier, M.F., Carver, C.S., & Gibbons, F.X. 1979 Self-directed attention, awareness of bodily states, and suggestibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1576—1588.
- シュブランガー, E. 1963 *Psychologie des Jugendalters*. (原田茂訳 1973 青年の心理 協同出版)
- 返田 健 1986 青年期の心理 教育出版
- 菅原健介 1984 自己意識尺度(self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184—188.
- 詫摩武俊 1978 青年の心理 培風館
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究, 38, 117—125.
- 牛島義友 1954 牛島青年心理学 光文社
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64—68.

付 記

本論文作成に当たり、京都大学教育学部教授斎藤久美子先生に、また卒業論文に引き続き京都大学高等教育教授システム開発センター(元大阪大学人間科学部)教授梶田穀一先生に非常に貴重な御助言・御指導を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

(1995.11.27受稿, '96.4.5受理)